

— 随想 —

雨の降る日

佐藤 秀子

秋、そして冬、風に吹かれた落葉が道端で身を寄せあつてささやいている。過日登った富田城も訪ずれる人も少なく、山もみじの木が静かに春の芽ばえの用意をしているだろう。

心を動かされるもの：それは廃虚や遺跡である。昔日の想いを内に秘めて永々と生きながらえてきた彼らの意志、わたし達に時の重みを感じさせてくれるやさしさ、強い気力で風雪に耐えてきたが力つきて剥落した壁、土に帰した諸々のもの。何百年を経てまだ余命を保っているのもう物体から神の域へと転生してしまった様にも思える。一人ぼつねんと、その中に佇んでいると、漂よっている寂寞とした想いに同化され、しばし時の空間を彷徨ってしまう。ひしひしと心に迫ってくる存在感はある。古文書を読む時の様に胸を熱くさせる。

先日、水攻めで有名な高松城々主、清水宗治の遺品展を見に行ったが、合戦の時、常用していた兜かぶと、その少し汚れた髭ひもがありし日の武将を忍ばせ、並んで陳列されていた。兄の月清入道自刃の短刀の鈍い光も、ぬぐいさられた血がみえるように生々しく、死して後別々の場所所で保管されていた其れ其れが、再び会あひし、懐旧の情にたえないだろうと、わた

しは溢れる涙をぬぐった。少し離れた場所に、これも並んでかけられていた辞世の句の掛軸、兄入道「世の中に、おしまるる時散りてこそ花も花なれ色もいろなれ」弟宗治「浮世をば今こそ渡れもろ武士の名を高松の苔にのこして」武将としての潔きよさとやはり隠しきれない無念さ……。

子孫で幕末期に活躍したが朝廷寄りの家臣の為に萩屋敷で自刃させられた二十二才の清水親知、その端正で凛々しい容姿と俊秀と言われた様を思わせる絶命手書の妙なる筆跡と文章、別の世に生まれ、ば名を成していたものをと若くして亡くなった彼の心中をおもいやると、又深いため息をついてしまった。閉館時間近く、城内には、わたし一人しかおらず又日射す中で生命を持ったもの達が語りかけるさみしい言葉は歴史の傍流で生きている者にとっては心ひかれる怪しい魔力であった。

その夜、余韻さめやらぬまま、例のごとくわたしはばんやりと考えるをしていて。ふと眼をあげると仏像が笑っていた。彼が家に来てからもう十年近くになる。十五センチくらいの木彫りの上半身像で大師様に似ている。顔の長さと同じくらいあるふくよかな耳とやさしく細い目でずーっとわたし達を見守ってきてくれた。下の方の英字が印刷してあ

って、その着ている黒っぽい袈裟衣の塗料は殆ど剥げ落ち古い木の匂いをする。

田舎の寺は瑠璃光寺と称し、本尊は薬師如来である。薬師如来は現世利益を中心とした仏で離島の不自由な生活をおくる人達が信仰したのだろう。日光、月光菩薩の脇侍の他、薬師十二神将の部下がいて、そのうちの武将として金比羅さんの宮毘羅大将がいる。丸亀と琴平は近くだからその関連もあるかもしれない。調べてみたい気がする。寺には古びた閻魔堂があつて、信心深い祖母に連れられて幼い頃、寺まいりにでかけたわたしは、舌を抜かれている悲しい顔の罪人と居並ぶ鬼達、一段上で形相凄まじい大王を戸の隙間から覗きみては悪いことはすまいと心に誓っていた。薬師如来は黒塗りの扉の奥に端座し、そのくすんだ姿は金色の釈迦如来と違って、なぜか心安まるものがあつた。先年、しばらくぶりに訪ねた寺は仏像は盗難にあい、閻魔堂は崩れ落ち屋根瓦が半分だけ残っていた。瓦礫の間に身を横たえた大王は、すっかり零落して威厳を失い、部下のことごとくを失つて意気消沈していた。せめて最後はと、冠を探しかぶせ、体を起こして近くにあつた板でまわりを囲った。その時、壁土に埋もれた小さい仏像の顔が見えた。堀りおこしてみると弘法大師を彫つた半身像である。単語として意味を持たない(多分、文字の途中で切つたからであろう)英文字が目に入り、一瞬、わたしは外国航路の船員が彫つたものかなと思つた。閻魔堂にあつたのは罪を悔いる為かそれとも死後の極楽浄土行きを願う為か、汚れた体をとにかく水で洗い、考えあぐねた末自宅に持ち帰つた。わたしが布に包んで鞆から

取り出した仏像をみて息子は、生きてみたいだねと言ひ、拾つてきたわけを話すと、そこで死ななくてよかったねとやさしかった。

それ以来、仏像は居間でわたし達と、一緒に暮らしている。朝夕仏飯を供え時には願ひ事をしたりして、家を留守にする時も、彼を心の隅で頼りにしているのである。わたしの行動を笑わず肯定してくれた家族、山や旅先での思い出の木の皮や石のかけら、落葉等を取りだして眺めていても、誰もそんながらくたとは言わず話を聞いてくれる。口では言わないが同居者三人には感謝している。

けれど机から眼をあげるといつもそこに座っている仏像は、わたしの邪まな考えをも見通していて、そのやさしい眼に会うと怒りの気持ものみこまずにいられない。そうしてわたしは偽りの善人にならざるを得ないのである。いつだったか雨の日、仏像を袋にいれて山寺へ行ったことがある。彼をその本堂へ置いてこようと思つたのである。心苦しさから逃れる為に。けれど荒れた寺で朽ちてゆく姿をおもうとやはり連れ帰つてきた。結局、わたしと一緒に、暮らしてゆくしかないかもしれない。友人が、信ずることがすべてを変ええるからね。信じれば心は通じるよと言つたが、子供の頃読んだ、村人の拾つた仏像の形をした木と長者の金色の仏像の相撲で、木の方が勝つた話をふと思ひだした。長者が負けた仏像に、そんなに立派な体なのにどうしてかと、問うと金色の仏像は、だって当然ですよ。私は大切にされて蔵の中、年に一度の食事、それにひきかえ彼は毎日、やさしく食事をもらつてゐるんですから。力がでるわけがないじゃありませんかと答えた。仏像に似た木は村人の信じ

る心に答えたのである。ほこりのついた仏像をぬるま湯で洗っているとその体は、手のひらに入ってしまうほど小さく軽い。わたしも年寄れはらずーっと生き続ける彼とは別れなければならず八十八ヶ所巡りに行く時に何処かの寺に頼んで堂の片隅に置いてもらおう。彼の心の供養は、なされてないのだから…と今は思っている。

以前、徳島へ行った時に足利義植の墓を西光寺にみた。その頃のわたしは、インカ帝国やエジプト、ギリシャ、ローマの世界史にしか関心がなく、友人が悲運の將軍と話してくれたのを、ただ頷いて聞いていた。二度も將軍職につきながら美濃、越中、周防、近江、淡路、阿波と諸国を流浪の旅におくつたと、書いてあった。彼は管領の細川政元に裏切られたが政元も又、養子に殺される。政元は修験者の行法に凝って妻帯をしていなかったので養子をむかえたのだが、もし実子がいれば殺されずにすみ歴史は少しかわっていただかもしれない。政元が奇怪な行動が多かったという記述を読んで、変人好みのわたしには興民深く、一向一揆の時、加賀門徒と幕府のあいだをとりなし、本願寺では聖徳太子の化身で観音と八幡の申し子だとされていたらしいが一般には天狗の修業だと高い所から飛びおりたりする愚かものだと思われており、その二様性が面白い。十年くらい先の読書三昧予定の日々には、くわしい書物を探してみたい。歴史も新しい資料や古文書等の発見によりおいおいかわってゆくかもしれない。その中で生きてきた魅力ある人物は、わたし達の心をとらえて離さない。雨の降る日は、地上に漂よっている彼らの霊も、ひっそりと軒先に身を寄せあい往年を語っている。雑音を消してくれる雨

音の中に、わたしも又ばんやりと誰かを想い頼杖たのづえをついたまま…この間にも後にしか知ることのできぬ年表の一行が、時の手によってどこかで書かれている…。